



安心 1.0～3.0へ AI 1.0～3.0へ

※本資料は、当社グループの経営戦略・研究的取組の説明を目的とするものであり、特定の診療・治療の勧誘や、医療機器・食品等の効能効果を示す広告ではありません。
また、医療行為・治療・診断等の勧誘・誘引を目的とするものではなく、特定の医療効果を保証するものではありません。

アニコム ホールディングス株式会社



第一部 世界で最も競合が多い保険が日本のペット保険である可能性

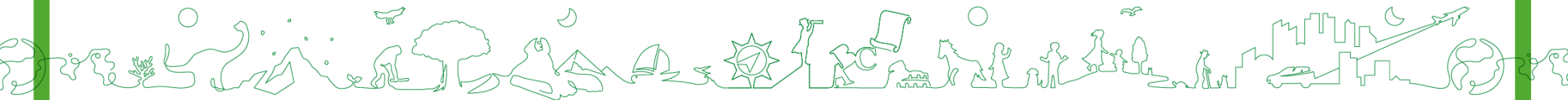
1. アニコム損保は安定した経営体制を維持
2. その理由

第二部 当社の戦略とは

1. 単なる保険金支払いの保険1.0から3.0へと進化させる
2. 保険3.0の実現は、A I 1.0から3.0への進化へ繋がる
3. 「A I 1.0から3.0への進化」

第一部

世界で最も競合参入が多い保険は 日本のペット保険である可能性

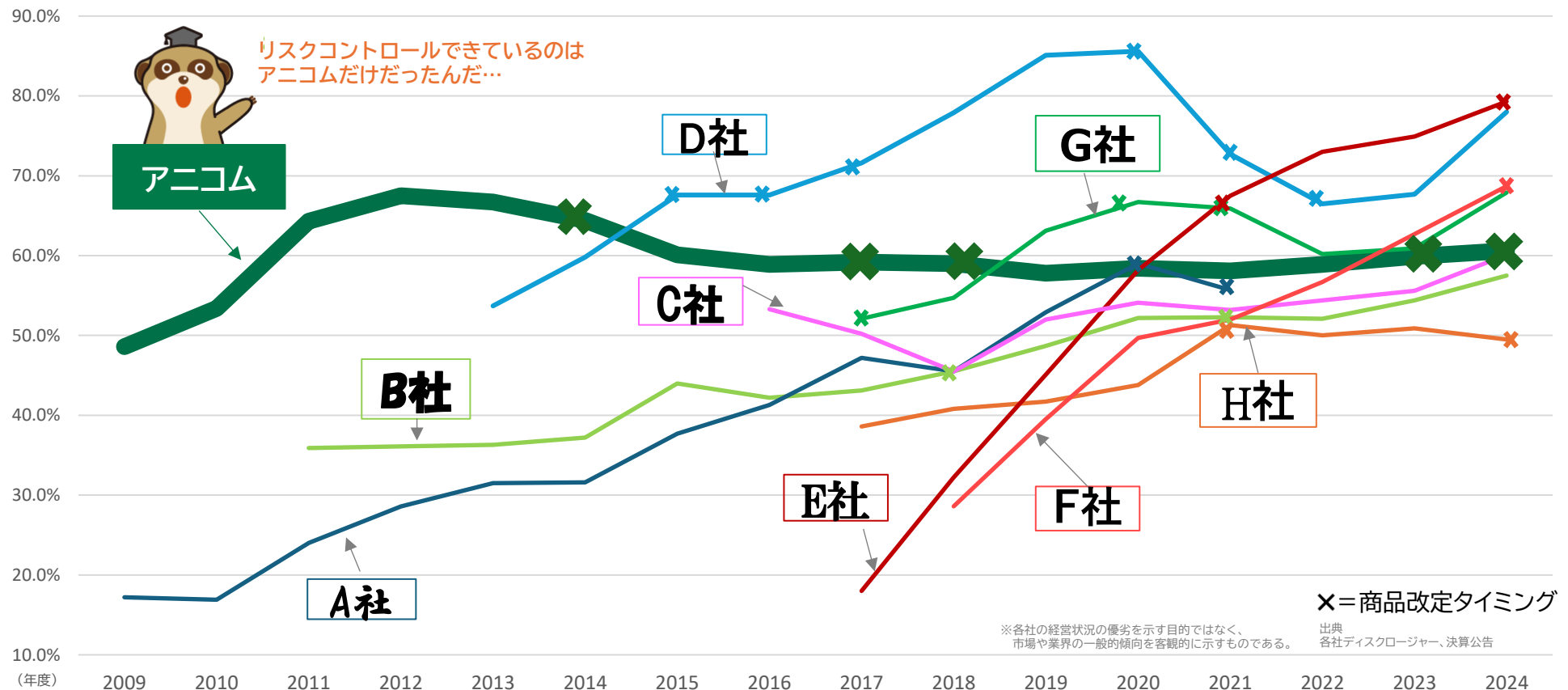


1. アニコム損保は安定した経営体制を維持

ペット保険における競合状況

各社の**損害率**(EIベース)の状況

「保険料 < 支払保険金」で収支悪化



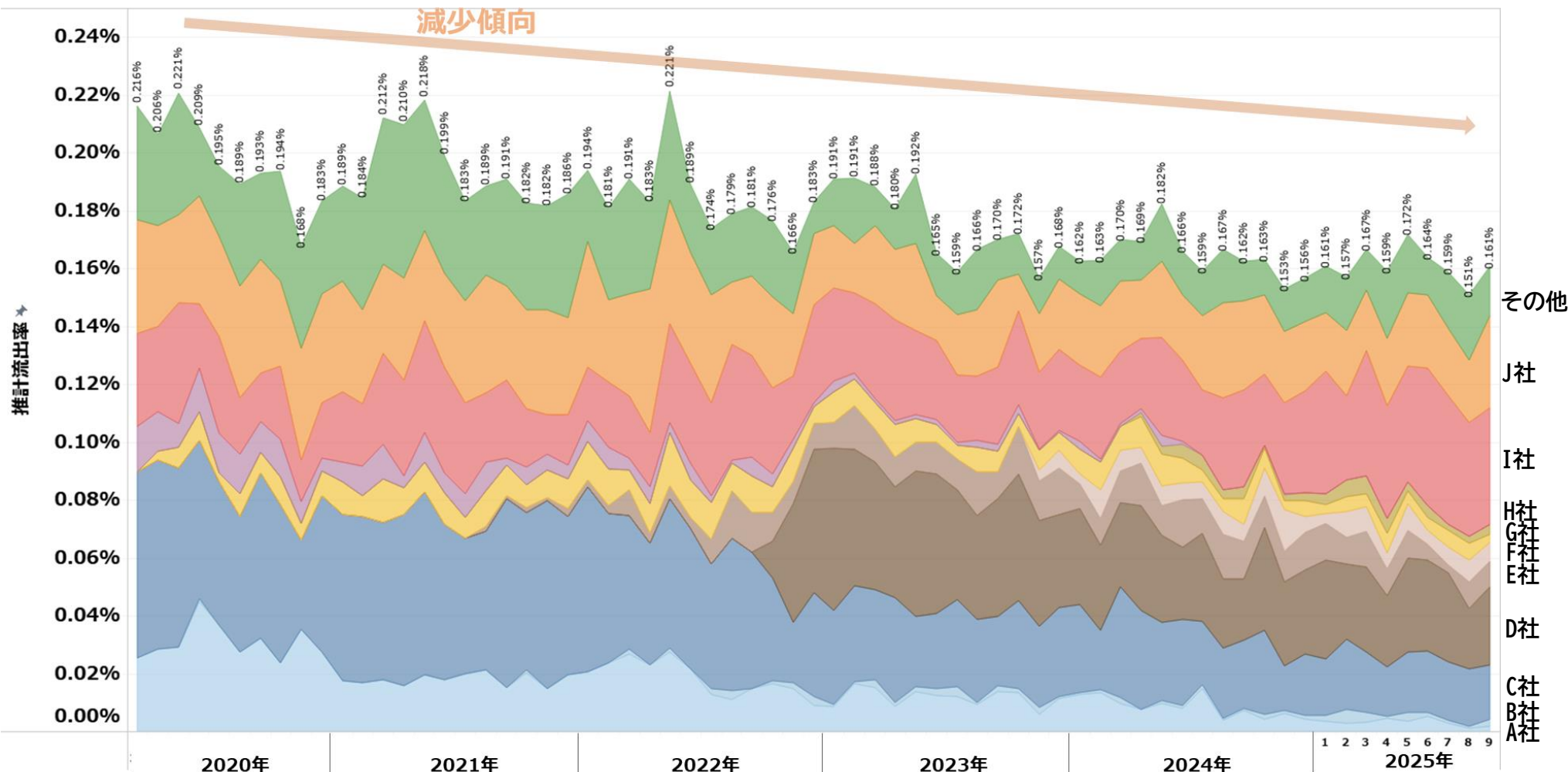
ペット保険は世界でも稀に見る競争激化市場 ~しかし、当社は安定経営に成功~

1. アニコム損保は安定した経営体制を維持

ペット保険における競合状況

競合他社への流出の状況（比率ベース）

■解約時アンケート：2020年3月～2025年9月
(※)非継続契約者に対するWebアンケート結果を用いて推計したアニコム損保から他社へ流出した保険契約件数が、流出が発生した月の保有契約件数に占める割合



他社への流出は減少傾向

2. その理由

(1) 業界全体としてUWに課題がある

①UW(アンダーライティング)

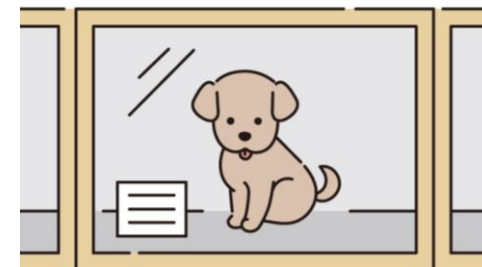
保険のマーケティングは、●「イニシャル」と●「セカンダリー」

新規(卒業・免許・ペット飼いたて)

「既存(ドライバー・飼育者・社員)」

「セカンダリー」はすでにリスクを自身で理解できているため、
悪績に繋がりが得る。

* ペットショップチャンネルは、ホワイトリスクであることが多い。



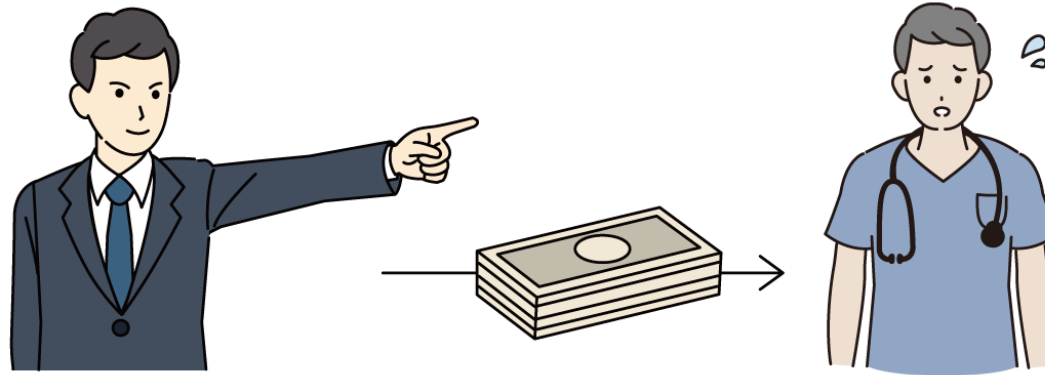
日本では法令上ペットショップが許容されているので、ペットショップ・チャンネルが重要。

ペットショップ/ブリーダー・チャンネルを制しようとする、
ペットショップ/ブリーダーの在庫動物のケアを行い、
一定の影響力があり得る**獣医師(動物病院)**に対応しておくことが有効。

2. その理由

(1) 業界全体としてUWに課題がある

②保険金査定 競合社において、保険金査定が甘い可能性が否定できない



ペット保険では、保険金請求不正が多い可能性がある。
一定の架空・過剰が想定され得て、
日々それらを調査している現状にある。

当社グループにおいては、動物病院事業を行っている。
PS・ブリーダーといったイニシャル・チャネル(NB New Born)における
良好なUW(Underwriting)に繋がっている可能性が否定できない。

* 欧米ではペット保険を成功させているアクサ社は日本では撤退し、当社に移管。

2. その理由

(1) 業界全体としてUWに課題がある



日本の獣医大学17大学で、獣医師免許保有者は4万人のみ。
うち、小動物臨床獣医師は2万人弱。年間卒業生はわずか1,000人。
うち、小動物臨床獣医師へ進む者は500人弱・・・。

当社における獣医師総数は150人を超え、
全アニコムグループの最大占有で10%を超えている。
アニコムのネットワークには、全国の獣医学部出身者が集まっており
互いの目があることで、
不正な保険金請求に対する事実上の抑止力になっている。

2. その理由

(2) 低価格戦略による当社からのチェリーピッキングの失敗

付加価値が無ければ…

保険料は安価設定されやすい

価格引き下げのスパイラルで収支悪化へ

A社

どれも同じ保険でしゅな！
名前が違うだけでしゅな。

C社

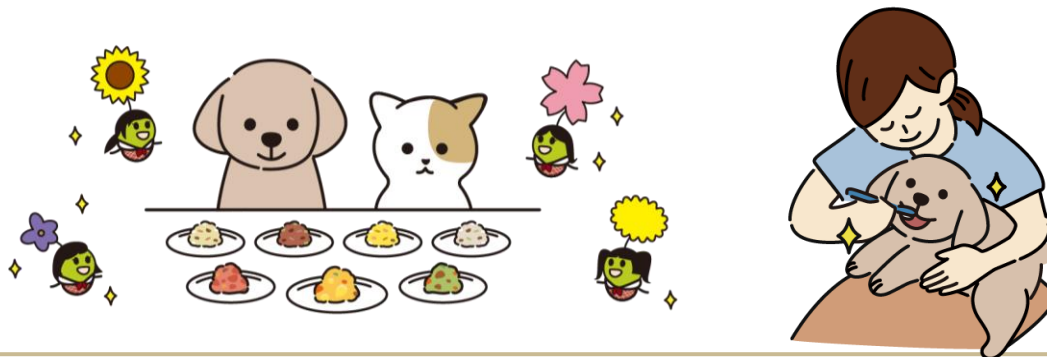
B社

D社



当社独自の付加価値

「保険＝安心」であるとすれば、「予防が付加価値となり得る」
即ち、健康維持による免疫維持、ウェルネス支援、ヘルスケア
意識の向上に向けたサービス強化（フード、口腔ケア等）



2. その理由

(2) 低価格戦略による当社からのチェリーピッキングの失敗

「**保険＝情報・知財**」とすれば、保険データのAI活用等による
新たな安心提供や、**保険サービスの実物給付**があり得る。



世界中の航空機の90%以上は、
商用・軍用を問わず自動操縦が行われている。
車も同じように、自動運転が進化している。

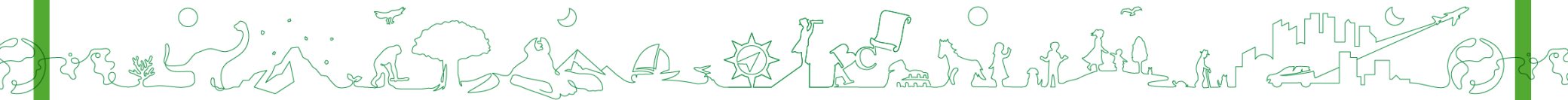
人間の運転や操縦は、「知識」と「画像」をもとに手足で操作する行為。
AIはその判断と動作を代わりに行うことで、人を置き換えてきた。



医療における手術は「**知識と画像**」といったAI1.0とAI2.0に加え
「**触覚**」というAI3.0が加わることで、手術の自動化に当然進み得る。 ※研究開発中

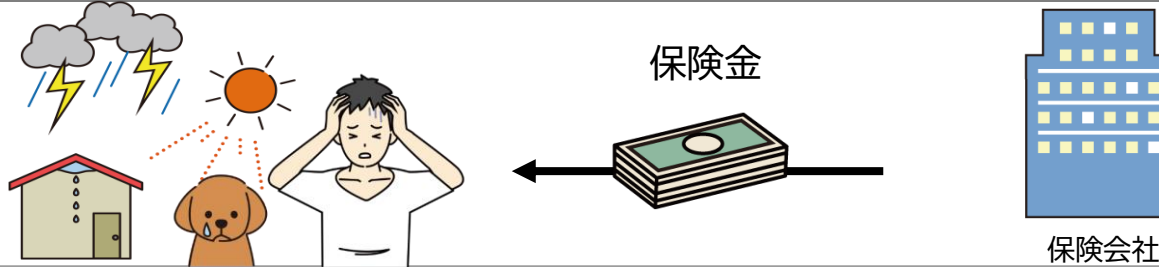
第二部

当社の戦略とは



1. 単なる保険金支払いの保険1.0から3.0へと進化させる

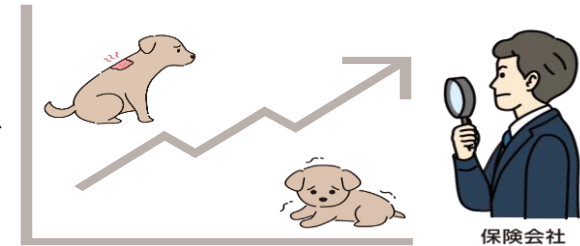
保険1.0：経済的給付による「安心の提供」



保険2.0：出来れば、傷病なく健康で過ごしたい。即ち予防の保険2.0。

ペットの寿命はヒトより遥かに短い…

欧米のペット保険でも、若齢期の儲かるポートフォリオ（受取保険料＞支払保険金）が、すでに逆ポートフォリオへ転じ、積み上げた保険財産の費消が始まっている。



保険3.0：すべての傷病を予防することは出来ない。

従って、万が一の際に、「より痛み・後遺症が少なく、偶然ではない・必然の手術の成功や治療」を得たいと願っている。保険3.0へ。



2. 保険3.0の実現は、AI1.0から3.0への進化へ繋がる

(1)「機械化・AI化」

電話の交換手・鉄道の保線等々、昔は交代で人手で行っていた。



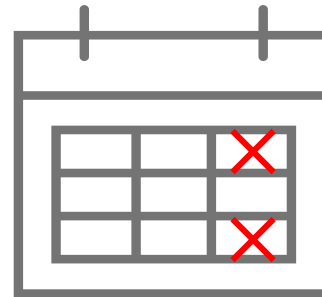
農業・漁業・・・金融業、全ての産業の発展の歴史は
「**肉体労働の機械化**」と「**知能労働のAI化**」と言える。

2. 保険3.0の実現は、AI1.0から3.0への進化へ繋がる

(2)医療における社会課題の解決に向けて

現在、世界中で
「医療における格差・公共性の破壊・自己犠牲問題による
夜間等の医療ひっ迫」が社会課題となっている。

医療課題の存在



2. 保険3.0の実現は、AI1.0から3.0への進化へ繋がる

(3)3K・3Dの解決がキー

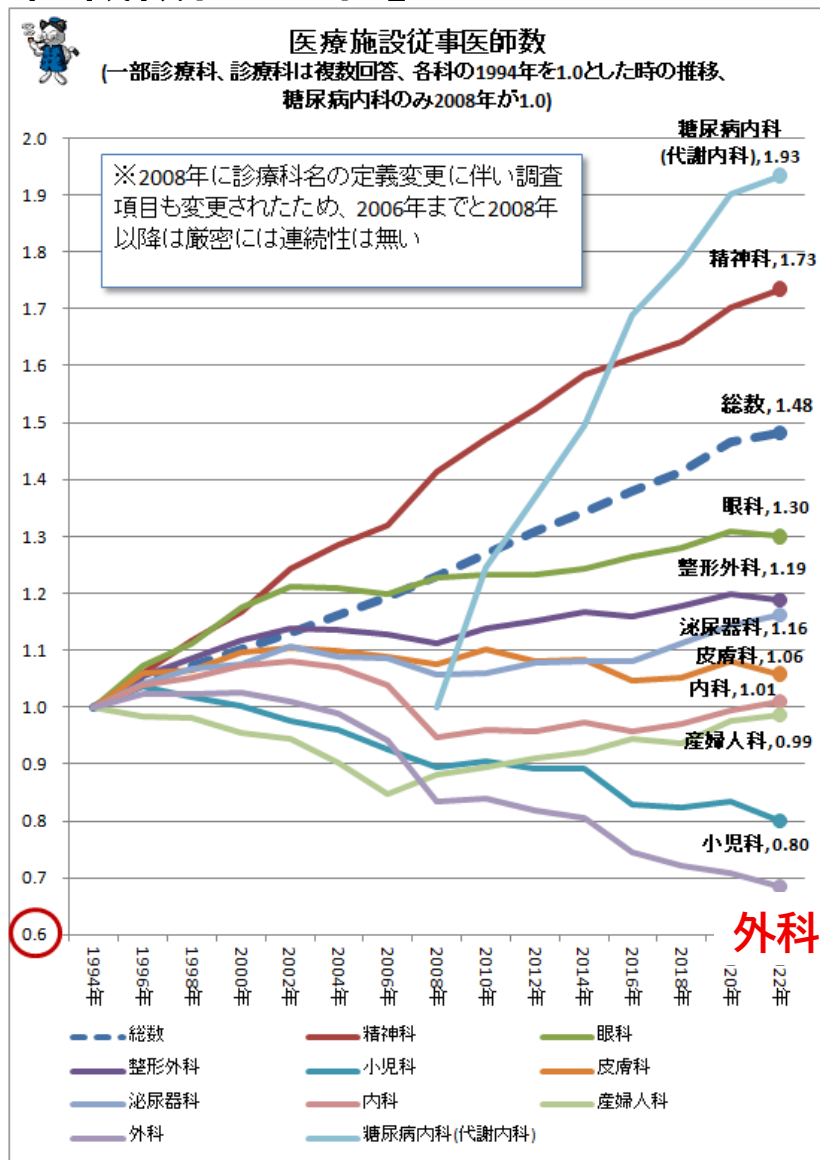
これらの解決策の中核が世界中のほぼ全ての産業における
3K・3D (Danger, Dirty, Difficult) の解決策となっている
「**機械化・AI化**」の推進である。

医療は3K



2. 保険3.0の実現は、AI1.0から3.0への進化へ繋がる

(4)「機械化・AI化」のラスト・フロンティアは手術(オペ)



外科医数は1994年比で年々減少し、
2022年には0.68倍に低下。
→ 約30%の減少。

オペは、医療における3K・3Dの代名詞と言え、現に世界中で、外科医(小児科・産婦人科)を含め、人材難となっており、医療ひっ迫の構造的原因の一つとなっている。



2. 保険3.0の実現は、AI1.0から3.0への進化へ繋がる

(5) ロボ×AIによる身体能力の拡張

一方で、ロボット・AIの活用は、「外科医の身体能力を極端に拡張させる。」
(視力・握力・聴力・判断力等)

即ち、医療用ロボは「外科医をスーパーマン化させ得る」。
実際に、ロボを履修した医学生の外科専攻率は高まっている。

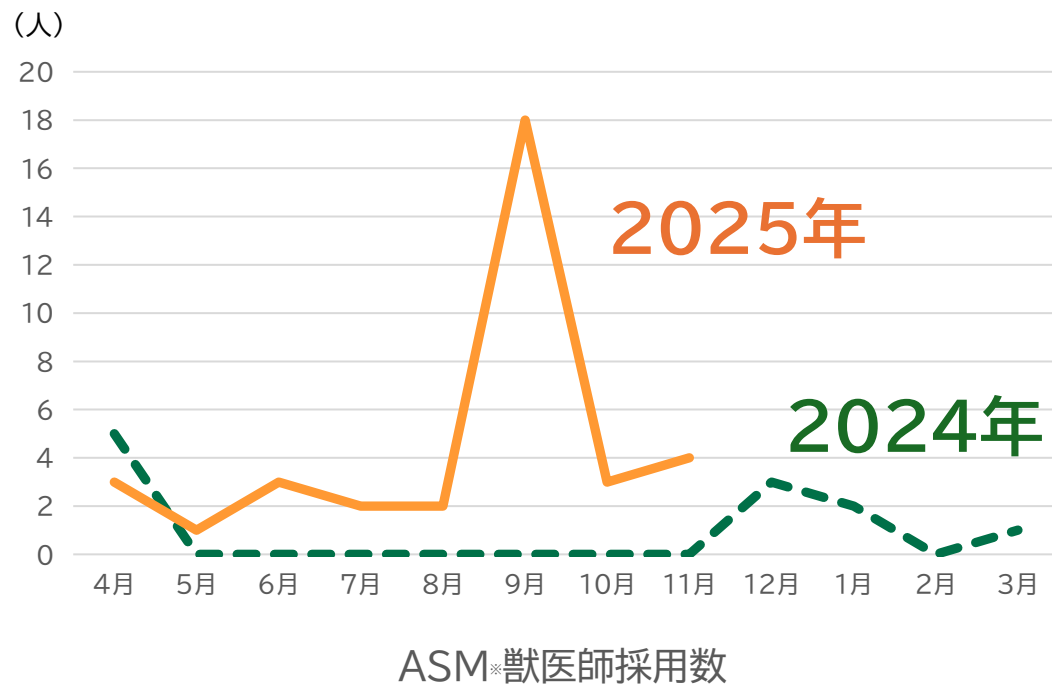


2. 保険3.0の実現は、AI1.0から3.0への進化へ繋がる

(6)当社における身体能力の拡張の状況

当社グループにおいても、獣医師・動物看護師採用力を2倍以上に高めており、これまでの悲願であった、夜間診療が11月から開始出来た。

獣医師・看護師 採用数推移



2. 保険3.0の実現は、AI1.0から3.0への進化へ繋がる

(7)保険・医療は二つのエンジンとなる

これにより、従来は人事権の制約により実質的な運営権限が限定され、単体での黒字化が困難であった動物病院事業においても収益を確保できる体制が整った。

結果として、これまでペットショップ・ブリーダーチャネルの獲得・維持や保険金削減策としてのみ機能していた同事業が、独立した利益創出事業として展開可能となる可能性があり得る。

動物病院事業単体での
単体収益化に向けた
構造転換を進めている



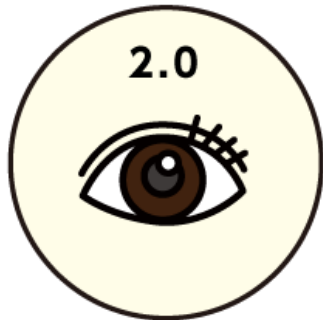
3.「AI1.0から3.0への進化」

(1)AI1.0



基本的な「**数字・文字**」を用いたAIの活用。
(現状のAIの主戦場)

(2)AI2.0



視覚が加わり、**AIが見て判断・サポート**してくる時代に。
現在は、ユーザーがアップロードした限定的な範囲に
よっているが、術野全体・心電図・麻酔モニター・術者の
表情等を総合的に判断し応答してくる時代へ。

3.「AI1.0から3.0への進化」

(3)AI3.0

①

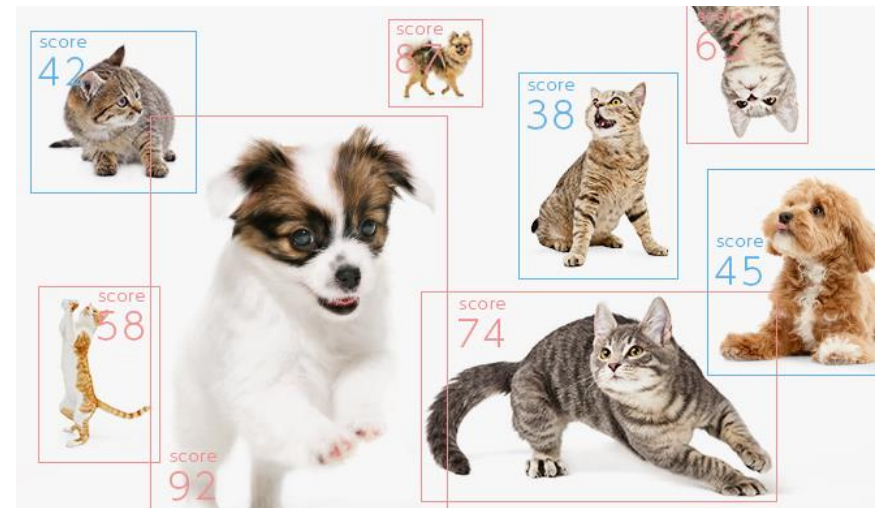
保険等の事務的職務はAI1.0の数字・文字により
大幅なサポートを得られつつある。



②

保険においても、傷病査定等に、
患部の写真、健康度アップに向けた
どうぶつ動画等を用いた感情判定
（日米で特許取得）へと視覚を導入した
AI2.0へと遷移しつつある。

感情を解析する感情AI
（特許第733.0258号）（US Patent 第12,417,655号）



※特許は技術アイデアの保護であり、医療上の有効性・安全性や
規制上の承認を意味するものではありません。

3.「AI1.0から3.0への進化」

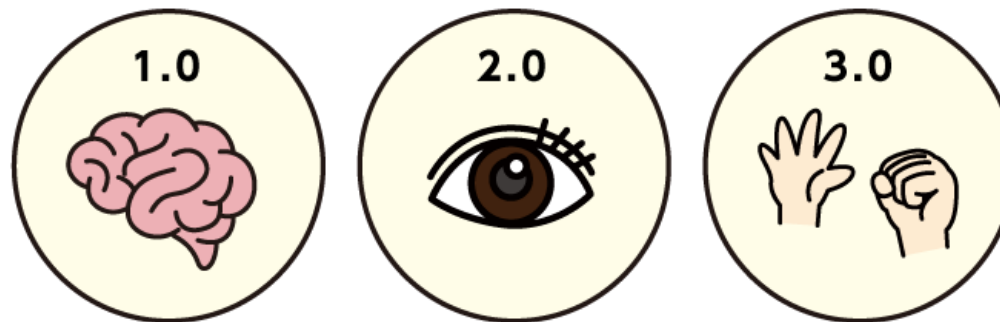
(3)AI3.0

③

特に、医療においては

- i 幅広い事前の医療に関する**知識**による判断
- ii 患者様の術野・心電図・・・等の**視覚**からの判断
- iii 実際に施術を行っている最中の「メス・鉗子等を通じた触覚」を元にした判断

と他の業種に比して、AI3.0である「**触覚**」を、必要とする部分が大きい。



現存ロボット技術では未だ、この「触覚」は不得意であり、
日本発の研究知見である繊細な触覚と、動物ならではの症例数の多さで、
新たな価値AI3.0をペットから先導していく。

